



所有区分の過渡期

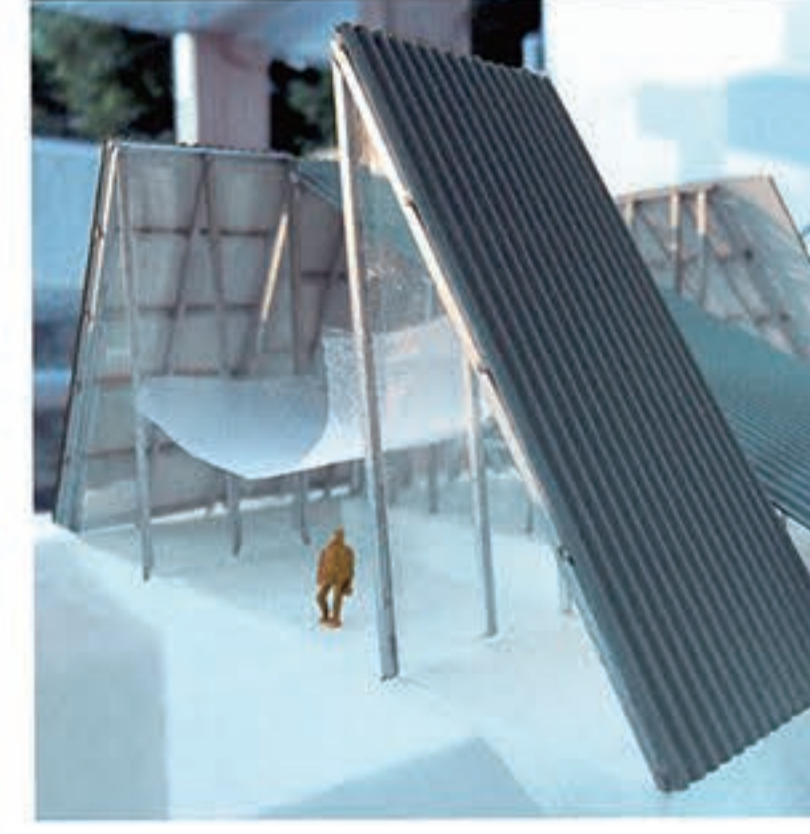
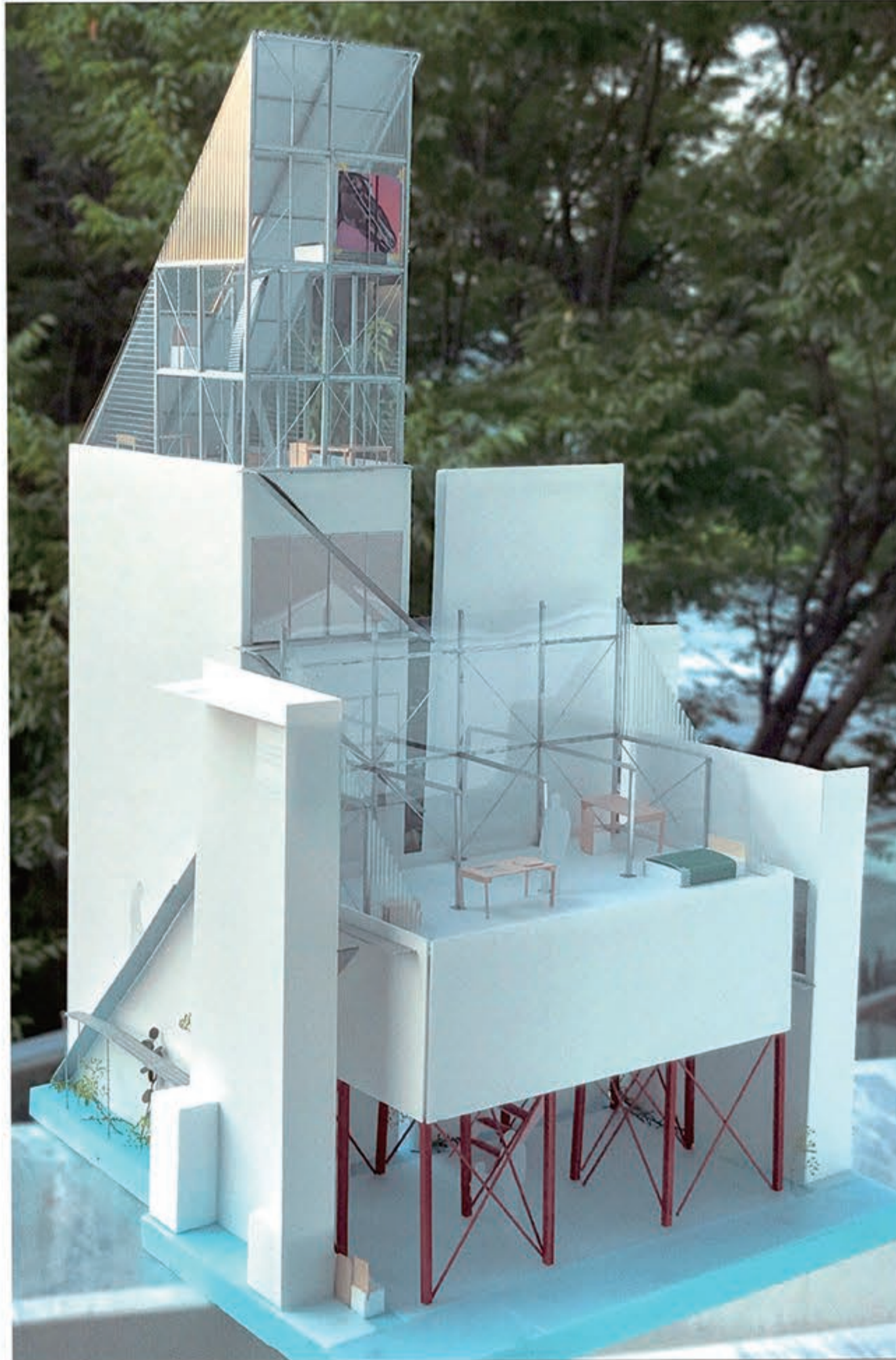
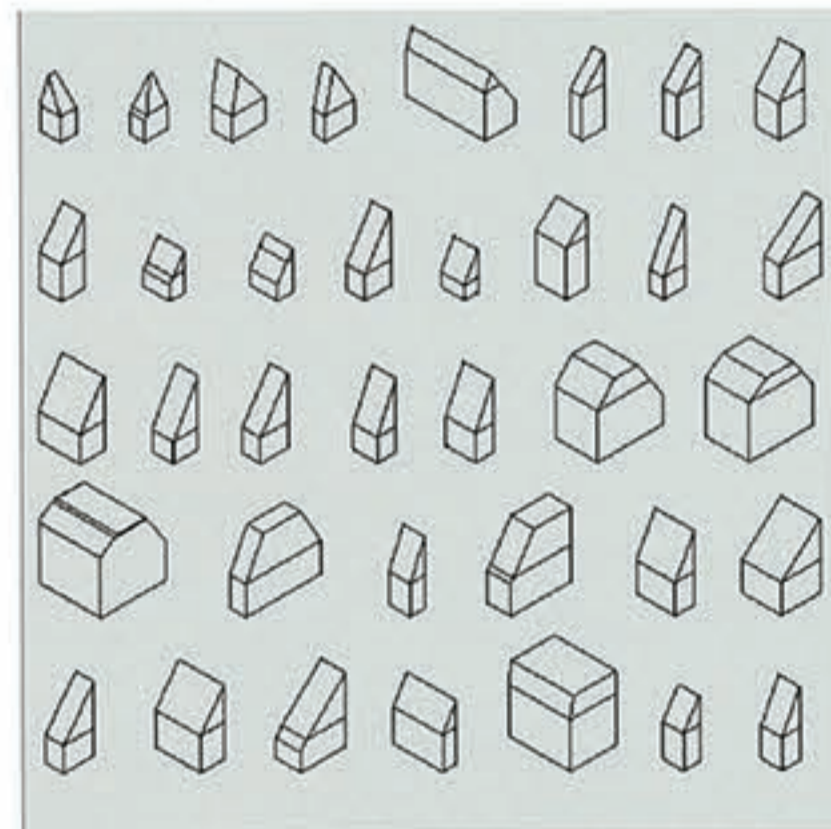
産業体系、法律、建物、人間など様々な主体のそれぞれのタイムスケールがずれる時期。

植物からマテリアルまで各主体をフラットに捉える事で、所有区分やものづくりの方法、街のコンテクストまで更新していく可能性を探します。



Phase1

私は空室率の低い上野桜木エリアにアーティストインレジデンスを計画するにあたり、多くの隙間を発見しました。そこでは植物が居場所を見つけていたり駐車場となっていたり、設備スペースとなっているところもありました。これらに共通して見られることは様々な主体がそれぞれの論理で居場所を発見していることです。そこで今回のプロジェクトでは、現在の街全体をランドスケープとしてとらえ、そこに居場所を見つける糸口を発見し、建築を行います。



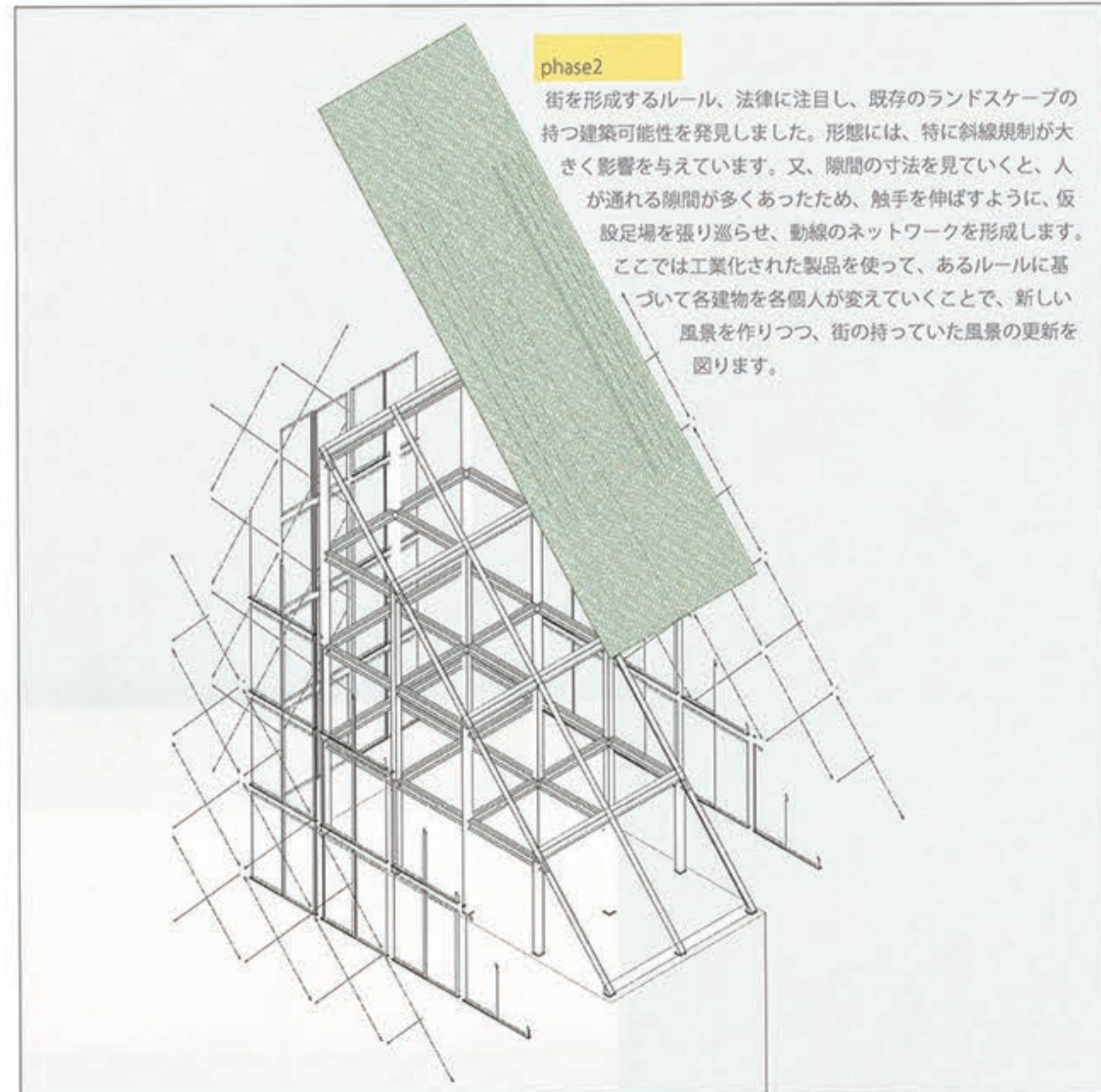
phase3

ランドスケープに依存した風景をきっかけに街が変化する一断面を切り取っています。屋上に住みついたアーティスト、仮設足場のネットワーク、隙間に生息する植物、既存の住宅、など隣りに重なった論理の断面が垣間見えます。ここでは、異なる主体が建築を通して相互に依存していることでストラクチャーのない既存建物内部にも変化を促すきっかけとなっています。断面図ではアトリエ、ギャラリー、カフェなど、が計画されています。はじめに決めたルールに基づいて眺めていく物語は、各建物の独立性は保ちつつも、所有区分をまたいでいくことで、離れていた風景が緩やかにつながっていく様子が発見できます。



最後に

社会構造の変化に伴い、過渡期を迎える家々に対し、複数の主体を重複させることで、スクラップアンドビルドを前提とした再開発と、既存の文脈に基づくリノベーションの間のような、来たるべき変化への下準備のようなものとしてこのプロジェクトが機能することを期待しています。



phase2

街を形成するルール、法律に注目し、既存のランドスケープの持つ建築可能性を発見しました。形態には、特に斜線規制が大きく影響を与えています。又、隙間の寸法を見ていくと、人が通れる隙間が多くあったため、触手を伸ばすように、仮設足場を張り巡らせ、動線のネットワークを形成します。ここでは工業化された製品を使って、あるルールに基づいて各建物を各個人が変えていくことで、新しい風景を作りつつ、街の持っていた風景の更新を図ります。

